

九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証Ⅱ ——総合型選抜によって多様な資質を持つ学生を受け入れられているか——

木村 智志, 播磨 良輔, 大石 哲也, 安永 卓生 (九州工業大学)

九州工業大学の総合型選抜は、学力の三要素を多面的・総合的に評価することをめざした入試である。本稿では、総合型選抜で入学した学生とそれ以外の学校推薦型選抜や一般選抜で入学した学生とを比較しながら、本当にコンピテンシーが高い学生を選抜できているのか、及びこれらの選抜で入学した学生は大学での学びに適応できているのかについて検証した。その結果、総合型選抜を通じて大学内の多様性が生み出されていること、総合型選抜Ⅱにおいては他の選抜に比べ有意にコンピテンシーの高い学生を選抜できていること、及び特別選抜の入学者は大学での学びに適応できているという結果が得られた。このことから総合型選抜の導入を通じて多様な資質を持つ学生を受け入れ、相互に高めあえる学びの場を作り出すという、当初の目標は一定程度達成できたと言える。今後、総合型選抜による異なる資質を持つ入学者が増えていくことにより、徐々に全学的な波及効果が現れていくことが期待できる。

キーワード：総合型選抜, 多面的・総合的な評価, 工学系大学, 追跡調査

1 はじめに

1.1 九州工業大学における入試改革

高大接続システム改革会議(2016)は、大学入試改革において、個別大学に対し、入学者選抜において学力の三要素を多面的・総合的に評価することを求め、国立大学協会(2017)は、2021年度までに国立大学全体で総合型選抜と学校推薦型選抜による入学者を入学定員の3割とすることを基本方針に掲げてきた。

工学系単科大学である九州工業大学では「多面的・総合的な入試」の設計にあたり、出口となる産業界のニーズを意識する必要があった。日本経済団体連合会による新卒採用に関するアンケート調査によると、採用選考に重視した点の1位はコミュニケーション能力(82.4%)、2位は主体性(65.3%)となっており(日本経済団体連合会, 2018)、これらの項目が選択される割合は年々高まっている。こうした傾向をふまえ、工学系の技術者・研究者に求められるエンジニアの資質として本学では以下の5つをディプロマポリシーとして公表している。

- ① 多様な文化の享受
- ② コミュニケーション力
- ③ 自律的学習力
- ④ 課題発見・解決力(探究力)
- ⑤ デザイン力(エンジニアリング・デザイン)

そこで本学はこれらの資質を重視するために、これまでと異なった学生を迎え入れ、これまでになかった学びの場を作り出すことを念頭におき、本学の展開するグローバル・エンジニア教育の中で中心的な存在となり

うる学生の獲得を目指した入試について検討を行った。そして、2019年度選抜からグループワークを課すAO入試(現・総合型選抜Ⅱ)を実施した(藤江ほか, 2019)。さらに、2021年度選抜からは、より多様な学生を受け入れるための選抜として大学入学共通テストを課さない総合型選抜Ⅰを開始した。これにより九州工業大学では2021年度選抜までに総合型選抜と学校推薦型選抜による入学者を入学定員の3割以上にすることができた。

また、本学は2018～2021年度の間、PROG¹⁾を用いて、ジェネリック・スキルを調査してきた。PROGはジェネリック・スキルを「リテラシー」と「コンピテンシー」の2つの観点から測定しているといわれるテストである。ここではリテラシーとは「知識を基に問題解決にあたる力」(PROG白書プロジェクト, 2016: 31)、コンピテンシーとは「自分を取り巻く環境に働きかけ、実践的に対処する力」(河合塾・RIASEC, n.d.: 5)とされている。本学の総合型選抜は求める人物像を「学習機会やグループ活動において中心的な役割を果たすスキル、態度を持つ学生」としており、ジェネリック・スキル、特にコンピテンシーがこれに近いと考えている。

そこで、PROGを用いて選抜区分別に学生たちのリテラシー、コンピテンシー及びGPAを比較したところ一般選抜に比べ推薦Ⅰによる入学者はコンピテンシーの「対人基礎力」が高い一方で、リテラシーの「情報分析力」「言語処理能力」が低いという結果が得られている(安永ほか, 2019)。

前稿（花堂ほか，2021）では，2019年度より学力の三要素を多面的・総合的に評価する入試として導入したAO入試について，実施結果及び入学後の外部テストの結果を元に，AO入試が「多面的・総合的な入試」となっているか，また，導入目的であったコミュニケーションに関わる資質が高い学生の獲得を実現できているかを検証した。その中で，各試験の評価結果の相関分析では，各試験のほとんどは独立しており，多面的・総合的な評価を実施できたことが示唆された。また，PROGスコアを入試区別に比較した結果からは，AO入試の合格者は対人基礎力・対自己基礎力に関連したスコアが高く，一般入試や推薦入試による入学者とは明らかに異なる傾向を持っていることを確認した。そこで，本稿では，AO入試（現・総合型選抜Ⅱ）導入以後の4年が経ち，最初の学生が卒業した段階に至り，改めて6つの選抜区分で入学してきた学生について比較し，総合型選抜は他の選抜とは異なった資質を持つ学生を受け入れられているか，入学後に制度設計時に想定した資質を生かした学びを行えているかという2点について，入学者の属性の多様性，PROGスコア，入学後の学業成績，卒業研究における評価などを用いて，継続検証することとした。

1.2 本研究の目的

本研究では，2019～2022年度の選抜で入学した学生を選抜区分ごとに分け，分析することで入試制度設計の検証を試みた。検証する上で着目したのは，第1に，学生の資質が選抜区分毎に違いがあり，多様な資質を持つ学生を受け入れているのかという点，第2に，総合型選抜で入学した学生は，入学後に制度設計時に想定した資質を生かした学びを行えているかという点である。これらを確認し，適切な入試を設計・実施できたのかを検証し，今後の総合型選抜の改善に役立てることを本研究の目的とする。

2 調査方法

2.1 選抜方法について

本稿では，一般選抜の前期日程（以下，前期），後期日程（以下，後期），学校推薦型選抜Ⅰ（大学入学共通テストを課さない，以下，推Ⅰ），学校推薦型選抜Ⅱ（大学入学共通テストを課す，以下，推Ⅱ）と2019年度の入学者選抜から実施している総合型選抜Ⅱ（大学入学共通テストを課す，以下，総Ⅱ），2021年度から実施している総合型選抜Ⅰ（大学入学共通テストを課さない，以下，総Ⅰ）での入学者を対象として分析，検証を行った。

なお，各選抜の方法は表1のとおりである。

2.2 選抜区分毎の追跡調査

調査は必要に応じて次のように処理をして行った。選抜時のセンター試験／大学入学共通テスト（以下，共通テスト）の成績は大学入試センターから公表されているデータを用いて全国偏差値に変換して用いた。

大学での学びへの適応は成績評価のうちGP（表2）及び単位修得率，ストレート進級・卒業率²⁾，指導教員アンケートを用いた。

また，ジェネリック・スキルについては2018～2021年に1年及び3年を対象に実施したPROGの結果を利用した。

表1 各区分の選抜方法

	前期	後期	推Ⅰ	推Ⅱ	総Ⅰ	総Ⅱ
共通テスト	○	○		○		○
学力検査 (記述)	○	○				
適性検査 (CBT)			○		○	
調査書			○	○		◆
面接 口頭試問			○		○	○
主体性等 申告書			○	○		
グループ ワーク ^{注2)}					○	○
課題解決型 記述問題					◆	◆
その他	◆志願理由書				学びの計画書 ◆レポート	◆高校入学後の活動に関する記述
公表している 重視する力	理数系科目の 学力と総合的 な基礎学力	理数系の特定 科目での強み	高校での学び や活動	高校での学び や活動	新しいことを 学ぼうとする 力や情報を書 き出す力	コミュニケー ション力とメ タ認知能力

注1) ◆印 合否判定時では点数化していない

注2) コロナ禍のため2021年度選抜では実施していない

*詳しくは選抜要項 (<https://www.kyutech.ac.jp/examination/gs-essential-point.html>) を参照のこと

表2 九州工業大学での得点とGPの関係

得点	0-59	60-64	65-69	70-74	75-80	80-84	85-89	90-100
GP	0	1.0	1.5	2.0	2.5	3.0	3.5	4.0

3 結果及び考察

3.1 入学者の多様性を確保できているか

多様な学生を受け入れるために本学では主に6つの選抜を行っている。ここでは，男女比，英語外部資格の提出率，ジェネリック・スキルの3つの観点から入学者の多様性について分析した。

3.1.1 男女比

本学では，女子学生の比率26%を学内の目標に掲

げている。2023年4月時点では約17%と令和4年度学校基本調査による全国平均とほぼ同等である。しかし本学の選抜区分毎の受験者や合格者における女子の比率を比較すると一般選抜に比べて受験者も総Ⅰ・総Ⅱ・推Ⅰは女子の比率が高く、この3区分の合格者の女子率は常に20%を超えていた(図1)。

男女別の合格率を比較すると、総Ⅰ・総Ⅱは、女子枠を設定したり、女子を優遇したりしているわけではないにもかかわらず、女子の方がやや合格率が高い傾向にあった。総Ⅰでは男子の出願者の英語資格・外部検定の資格提出率が66.2%に対して女子の提出率は84.8%、総Ⅱでは男子が66.9%に対して女子が78.1%であったことから英語の得意な女子が受験しやすくなっているという可能性がある。このことから総合型選抜は理工系を目指す女子の受験機会を増やすことで、本学の女子学生の比率向上に寄与しているといえる。

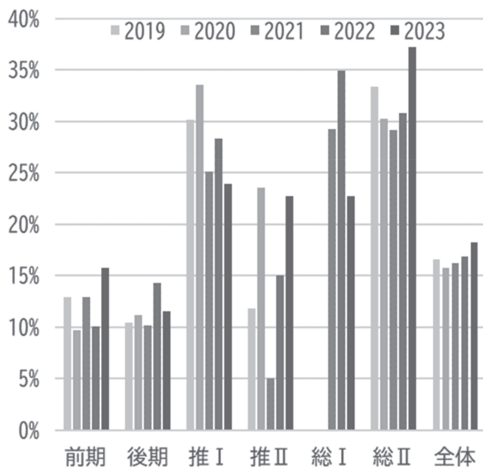


図1 選抜区分ごとの合格者の女子率

3.1.2 英語外部資格の提出率

本学では、今回の分析対象とした各選抜では英語資格・検定試験を独自の換算表(表3)を用いて英語の配点の最大20%まで加点する加点方式で利用可能としているため、たとえ低いスコアであっても、高校時代に受験した場合は提出していると考えられる。そこで選抜区分ごとに英語外部資格・検定試験の提出率をみることで英語への興味関心を比較できると考えた。その結果、特別選抜合格者の方が20%以上高く提出されていた(図2)。また、表3から提出者数が一定になっている2021-2023年の提出者の資格換算点を算出し、加算割合の平均を比較したところ、前期64%、後期69%、推Ⅰ60%、推Ⅱ68%、総Ⅰ64%、総Ⅱ62%と、いずれも60-70%の範囲にあり、前期と特別

選抜とを比べても大きな差はなかった。特に総Ⅰは出願時期が9月と推Ⅰよりも2カ月早く、資格の取得期間短い。しかし、他の特別選抜と同様に、提出率が一般選抜より有意に高いことは英語の学習に対して抵抗感がなく、グローバルに対する興味関心を持っている学生を増やすのに寄与したと考えた。

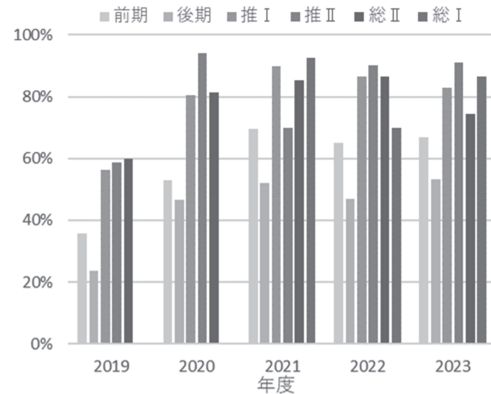


図2 選抜区分ごとの外部検定の提出率

3.1.3 ジェネリック・スキルについて

前期、後期及び推Ⅱは、推Ⅰ・総Ⅰ・Ⅱに対してそれぞれリテラシーが高いという結果が得られた。一方でコンピテンシーは総Ⅱが他の選抜に比べて高いという結果が得られた(図3)。また、総Ⅱは、特に対人基礎力と対自己基礎力の平均が他よりも1点以上高く、行動持続力なども高い結果であった。このことからグループワークはコンピテンシーが高い学生を選抜するうえで、一定の効果があるといえる。2021年の総Ⅰで差がみられなかったのは、初年度であることに加え、コロナ禍によりグループワークが実施できなかった(大野ほか, 2022)ことによると考えられる。その一方で、課題解決型記述問題についての評価基準に近いリテラシーが、総Ⅰ・Ⅱともに推Ⅱより低いことは、課題解決型記述問題での選抜が有効に機能していないことが示唆される。これは最終の合否判定においては配点化せず、面接の材料としてのみ利用していることが影響していると考えられる。

表3 九州工業大学での英語資格・外部検定換算表

換算割合 (%)	英検, 英検CBT, 英検S-CBT, 英検S-Interview [注1]					GTEC (検定版) (CBT)	TOEIC (L&R) (S&W) [注2]	TOEFL iBT [注3]	TEAP	TEAP CBT	ケンブリッジ英語検定	IELTS
	各受験級のCSEスコア判定対象範囲											
	1級	準1級	2級	準2級	3級							
100	2630以上					1350以上	1845以上	95以上	375以上	800以上	180以上	7.0以上
90	2304	2304以上				1190	1560	72	309	600	160	5.5
80		2150	2150以上			1090	1380	58	275	525	150	5.0
70		1980	1980			980	1180	45	235	435	142	4.5
60			1950			960	1150	42	225	420	140	4.0
50			1850	1850以上		850	915	31	190	350	132	3.5
40			1790	1790		790	835	25	170	300	127	3.0
30			1728	1728		720	755	20	145	255	122	2.5
20				1700		690	625	16	135	235	120	2.0
10				1670	1670以上	650	595	13	115	195	118	1.5
0	2304未満	1980未満	1728未満	1670未満	1670未満	650未満	595未満	13未満	115未満	195未満	118未満	1.5未満

[注1] 英検はCSEスコアにより換算点の判定を行うが、各受験級の試験内容で判定可能とされている範囲のスコアを対象とする。

[注2] TOEIC(L&R)(S&W)は、TOEIC(S&W)のスコアを2.5倍にしてTOEIC(L&R)に合算したスコアで換算点を判定する。

[注3] TOEFL iBTは、Test Date スコアのみを利用対象とする。(MyBest スコアは利用しない。)

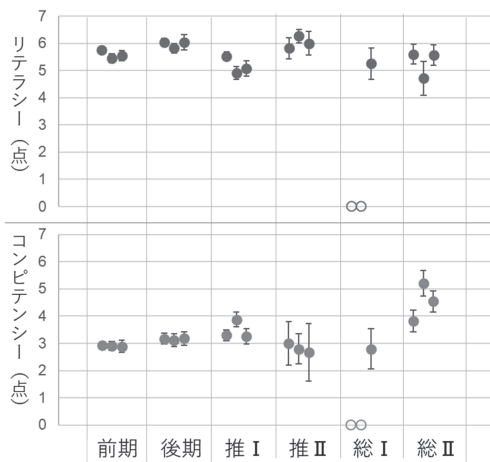


図3 選抜区分ごと1年時のPROGの平均

(左から2019, 2020, 2021年, バーは95%信頼区間を示す, 総Iは2021年のみ)

3.2 総合型選抜は本当にジェネリック・スキルを重視した選抜となっているのか?

3.2.1 総I・IIとそれ以外とでのPBL科目の比較

総合型選抜ではグループワークだけでなく課題解決型記述問題を課すなどを行っていることから、実験科目やPBL科目でも一定の活躍に期待していた。そこでA学部の1, 2年生対象のPBL及び実験科目についてそのGPの分布を比較した。推Iと総Iは比較的高い傾向がみられたが、2021年度を除き、総IIが他の選抜よりも高い傾向を示すことはなかった(図4)。

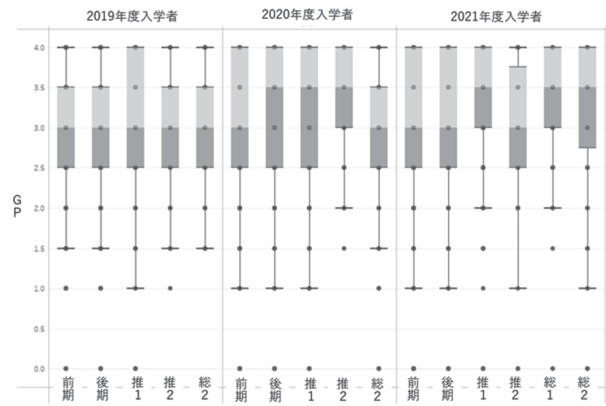


図4 選抜区分ごとの1,2年向けPBL/実験科目の成績

3.2.2 総IIと推IIのPROG比較

総IIと推IIとは併願できない選抜方法であり、ともに共通テストを課すが、グループワーク・面接を実施するか、調査書を含めた書類審査のみで実施するかに違いがある。そこで共通テストの偏差値の分布(図5)とPROGの調査(表4)から比較した。その結果、共通テスト及びリテラシーについては推IIのほうが高いという結果が得られた。一方でコンピテンシーについては対人基礎力と対自己持続力で総IIの方が有意に2点ほど高い結果が得られた。これらのことから総IIでは同じ共通テストを利用する推IIとは異なった資質を持つ学生を選抜しているといえる。

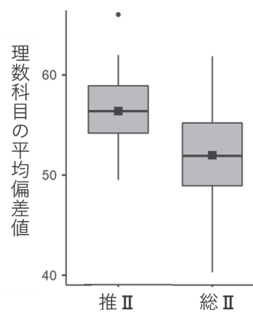


図5 総IIと推IIの共通テストの偏差値分布 (p<0.01)

表4 総IIと推IIの1年時PROG (3か年)での比較

	区分	N	平均値	(p値)	中央値	標準偏差	標準誤差	
リテラシー領域	推II	23	6.17	0.002	6	0.78	0.16	
	総II	31	5.10		5	1.58	0.28	
情報収集力	推II	23	4.43	0.008	4	0.59	0.12	
	総II	31	3.74		4	1.21	0.22	
4つの力	情報分析力	推II	23	4.43	0.043	4	0.59	0.12
		総II	31	3.97		4	1.05	0.19
課題発見力	推II	23	4.22	0.064	4	1.04	0.22	
	総II	31	3.58		4	1.43	0.26	
構想力	推II	23	4.09	0.04	4	1.16	0.24	
	総II	31	3.39		4	1.26	0.23	
処理能力	言語処理能力	推II	23	4.43	0.038	5	0.73	0.15
	総II	31	3.87	4		1.20	0.22	
非言語処理能力	推II	23	4.35	0.205	5	0.78	0.16	
	総II	31	3.97		5	1.38	0.25	
コンピテンシー領域	推II	21	2.76	< .001	2	1.64	0.36	
	総II	28	4.89		5	1.23	0.23	
3つの力	対人基礎力	推II	21	2.81	< .001	3	1.60	0.35
	総II	28	5.25	6		1.32	0.25	
対自己基礎力	推II	21	2.95	< .001	3	1.56	0.34	
	総II	28	4.71		4.5	1.54	0.29	
対課題基礎力	推II	21	4.00	0.711	4	1.67	0.37	
	総II	28	3.82		4	1.63	0.31	
対人基礎力	親和力	推II	21	2.95	< .001	3	1.69	0.37
	総II	28	5.00	5		1.70	0.32	
協働力	推II	21	3.05	< .001	3	1.99	0.43	
	総II	28	5.21		5.5	1.69	0.32	
統率力	推II	21	2.90	< .001	3	1.48	0.32	
	総II	28	4.96		5	1.53	0.29	
対自己基礎力	感情制御力	推II	21	3.05	0.002	3	1.24	0.27
	総II	28	4.25	4		1.32	0.25	
自信創出力	推II	21	2.76	< .001	2	1.64	0.36	
	総II	28	4.46		5	1.62	0.31	
行動持続力	推II	21	3.10	< .001	3	1.73	0.38	
	総II	30	4.83		4.5	1.53	0.28	
対課題基礎力	課題発見力	推II	21	4.33	0.188	5	1.91	0.42
	総II	28	5.00	5		1.44	0.27	
計画立案力	推II	21	3.67	0.214	4	1.77	0.39	
	総II	29	3.00		2	1.95	0.36	
実践力	推II	21	4.29	0.511	4	1.42	0.31	
	総II	28	4.00		4	1.59	0.30	

3.3 大学での学びへの適応

一般に「特別選抜による合格者は学力が低く、大学での学びに適応できない」という指摘が根強くある。そこで、特別選抜の学生が大学での学びに適応しているか、特に総IIの学生がどのように卒業していったかを調査した。

3.3.1 選抜区別の単位修得率とGPの分布

入学者を選抜区分毎の単位修得率を比較すると、主

に1, 2年生対象の基礎系科目, 2~4年生対象の専門系科目とも一般選抜入学者に比べると総I・総IIはやや低くなる傾向にあった(図6)。GPに注目すると、総Iには専門系科目では差が小さくなっている一方、総IIは全体的に他の選抜に比べて低いまの傾向にある(図7・8)。これは総IIが他の選抜に比べて成績の分布が広い(分散が大きい)ことによる。

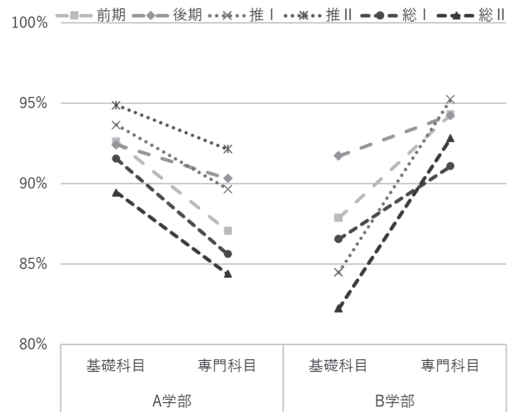


図6 選抜区分ごとの単位修得率

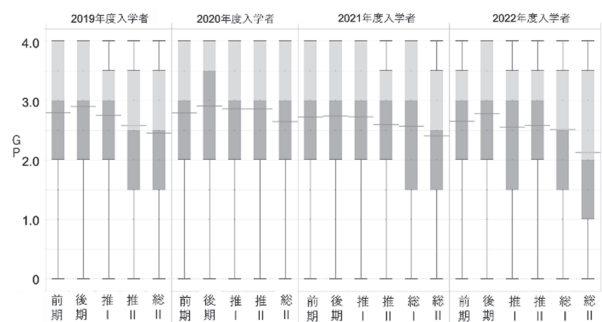


図7 基礎系科目(必修)のGPの分布

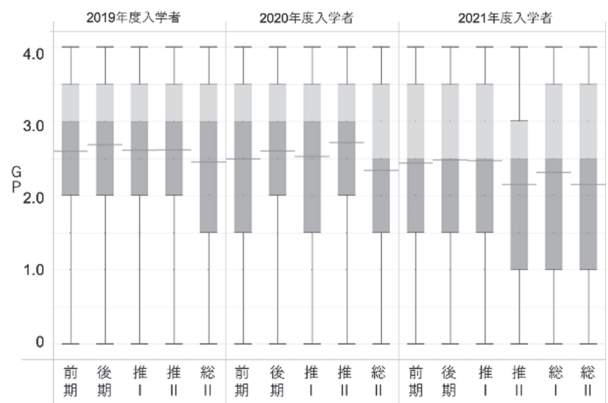


図8 専門系科目(必修)のGPの分布

3.3.2 選抜区分別のストレート進級・卒業率

大学での学びに適応していない場合は、ストレート進級・卒業率²⁾が定員の約50%を占める前期の学生よりも低下すると考えられる。しかし、図9、10の通り、ストレート進級・卒業率に関して、前期入学者と比較すると、2019年度の総Ⅱを除きいずれも1を超えている（前期入学者のそれよりも高い）ことから留年や退学をする学生の比率は他の選抜に比べて高いとは言えない。つまり、先の項と併せて考えると「成績はやや低いものの、留年や退学に至るまでの成績不振ではない」ことから、総合型選抜での入学者は大学での学びに適応できているといえる。

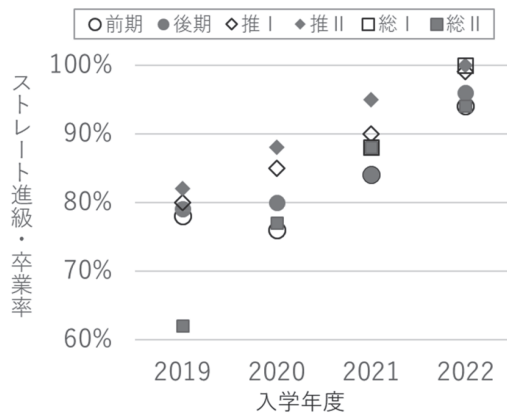


図9 入学年度別ストレート進級・卒業率

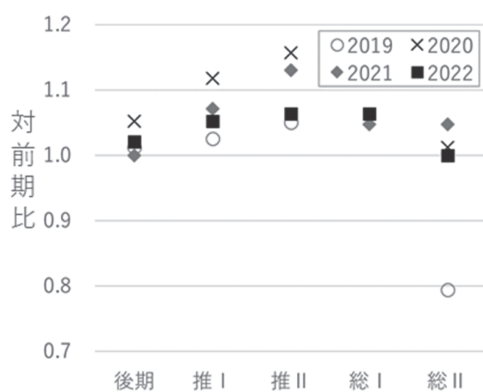


図10 選抜区分別ストレート進級・卒業率
(対前期比)

3.3.3 AO入試（現・総Ⅱ）入学者の卒業研究

2019年度の総Ⅱの入学者が2022年度に卒業するのに合わせて、卒業研究修得者の成績分布からの比較を行った。図11のとおり、総Ⅱの入学者は、特別高い評価を受けた者はいないが、相対的には高い評価帯に

集中しており、他の選抜区分とそん色がないことが分かった。

また成績には表れにくい研究室の様子について、総Ⅱの入学者を指導した教員に対し、選抜区分を明示した状態でアンケート調査を行った。アンケートは各項目に対して平均を出すとともに、ネガティブな評価された人数(A)とポジティブな評価された人数(B)の比を算出した(表5)。その結果、選抜時に重視している主体性や協働性について高い評価が得られていることや、コメント評価でも多くの項目でネガティブな評価を受けている学生よりもポジティブな評価を受けている学生の方が2倍程度多かった。2019年度の総Ⅱの入学者はストレート進級率が低く、教員の中にもネガティブなバイアスがかかっている上での結果であることを踏まえると、卒業時におけるディプロマポリシーの観点から、少なくともストレートに卒業した学生だけをみれば、選抜方法として適当であったともいえる。すなわち、少なくとも2/3以上の入学者が、入学時に期待されるようなコンピテンシーの高さを生かしていたことがうかがえた。

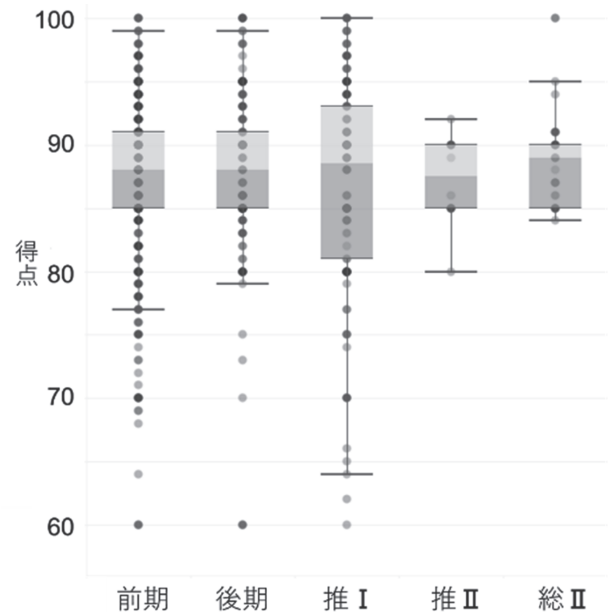


図11 卒業研究（修得者）の得点の分布

表5 総Ⅱ入学者の卒業研究の指導教員アンケート

質問項目	平均	B/A比
【研究における協働的な活動】において、中心的な役割を果たしていた。	1.91	1.30
【研究以外の協働的な活動】において、中心的な役割を果たしていた。	2.15	2.80
他の学生を尊重し、一緒に活動しようとする態度が見られた。	2.52	3.80
学生プロジェクトや学外の活動等、多様な人々との活動に熱心に取り組んでいた。	2.27	3.60
卒業研究に主体的に取り組んでいた。	2.91	4.00
卒業研究に取り組む上で必要な学力を身につけていた。	2.58	3.50
卒業研究に取り組む上で必要となる専門的な知識や技能を身につけていた。	2.42	2.57
学会発表等につながるようなレベルの高い研究活動に取り組んでいた。	2.27	1.89
卒業研究や研究室の諸活動において、創造性や独創性を発揮していた。	1.82	0.93
失敗しても、試行錯誤を繰り返し続けようとする態度が身につけていた。	2.39	2.43
困難な課題にも挑戦しようとする態度が身につけていた。	2.36	2.25
より高みを目指そうとする態度(向上心)が身につけていた。	2.33	2.83

注) 選択肢とpt, グループは次の通り

選択肢	pt	グループ
当てはまらない	0	(A)
やや当てはまらない	1	
どちらともいえない	2	
やや当てはまる	3	(B)
当てはまる	4	

3.4 AO入試(現・総Ⅱ)によって大学全体のコンピテンシー向上につながっているか

ここまで、総合型選抜、特に総Ⅱの入学者のコンピテンシーの高さについて述べてきたが、AO入試導入以前と比較し、導入後の3年生全体のコンピテンシー等の変動について調査した。しかし、2019年度の選抜区分別の1年時から3年時の変化についてはほとんど差が見られなかった(図12)。さらに、2016~2019年度の入学者全体の3年時のPROG調査を比較したところ、上昇するようなことは見られなかった(図13)。これらのことから総合型選抜により期待されるような波及効果は見られなかった。これはコロナ禍により学生間の交流が制限されたためであることが推察され、総合型選抜による学生の多様化の波及効果が表れるのにはもう少し時間がかかると考えた。

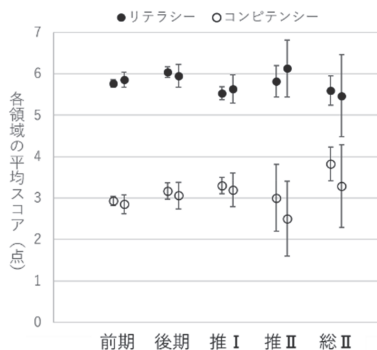


図12 2019年度入学者1年時(左)と3年時(右)のPROGの平均(バーは95%信頼区間を示す)

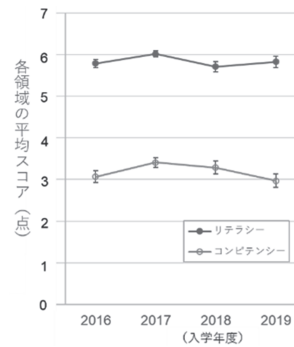


図13 3年時の全体のPROGの平均の変化(バーは95%信頼区間を示す)

4 まとめ

4.1 結論

これまで述べた調査結果を、①~⑤として総括する。

- ① 総合型選抜も含めた特別選抜は女子率の向上と英語に興味を持つ学生の増加に寄与している。
- ② 総合型選抜のグループワークや面接はコンピテンシーの高い学生の獲得に寄与している。
- ③ 特別選抜での入学者はGP面ではやや一般選抜に劣るが進級率や卒業率から見る限り大学での学びに適応しているといえる。
- ④ 総Ⅱの入学者は主体性や協働性を発揮して卒業研究時に取り組んでいる。
- ⑤ 総合型選抜による多様化に伴う、学生全体への波及効果は現時点では観測されなかった。

以上のことから、総合型選抜を通じて多様な資質を持つ学生を受け入れ、相互に高めあえる学びの場を作り出すという目標は、一定程度達成できたといえる。

4.2 今後の課題

今回、総合型選抜を通じて多様な資質を持つ学生を受け入れ、相互に高めあえる学びの場を作り出すことまでは確認できたが、その波及効果が表れるのにはもう少し時間がかかると考えた。今後は、総Ⅰ・総Ⅱに対しての入学前教育を実施して、よりコンピテンシーの高さを生かせるような姿勢を促し、学部を超えた交流の中核になったり、学生プロジェクトや自主的な勉強会等への参加や主宰したりしやすい環境を整えていきたい。また、授業スタイルの違いとしてPBL授業等の成績などを参考に分析を進める必要があると考えている。また、総Ⅰは総Ⅱほどコンピテンシーが高い学生を選抜できていないこと、及びリテラシーや対課題基礎力の観点から判断すると、総Ⅰ・総Ⅱとも課題解決型記述問題での選抜が十分には機能していないことは今後の課題である。そこで、今後も引き続き調査

を続け、課題決定記述問題の合否判定時の配点化や波及効果の有無について検証する。

注

- 1) PROG (Progress Report on Generic Skills) は学校法人河合塾並びに株式会社リアセックが開発・実施しているジェネリック・スキルの評価試験である。
- 2) ストレート進級・卒業率は次のように求めた。
$$1 - (\text{留年者数} + \text{退学者数} + \text{除籍者数}) / \text{入学者数}$$

謝辞

本研究を進めるにあたり、活水女子大学の花堂奈緒子先生及び鳥取大学の進藤明彦先生より分析について助言をいただきました。ここに記し謝意を表します。

参考文献

- 藤江美奈・安永卓生・播磨良輔・山下修充 (2019). 「入学者選抜の観点からグループワークの評価方法とその制度設計」『令和元年度 全国大学入学者選抜研究連絡協議大会 (第14回) 研究発表予稿集 I』, 185-190
- 河合塾・RIASEC 資料 (n.d.) 「ジェネリックスキル測定・育成ツール『PROG』のご案内」(導入時配布資料)
- 花堂奈緒子・播磨良輔・安永卓生 (2021). 「九州工業大学における多面的・総合的な入試の制度設計検証」『大学入試研究ジャーナル』31, 111-118
- 国立大学協会 (2017年11月20日) 「2020年度以降の国立大学の入学者選抜—国立大学協会の基本方針—」
- 高大接続システム改革会議 (2016). 「最終報告」文部科学省
- 日本経済団体連合 (2018). 「2018年度新卒採用に関するアンケート」<http://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf> (2023年1月21日)
- 大野真理子・花堂奈緒子・播磨良輔 (2022). 「オンライン入試の意義と課題」『大学入試研究ジャーナル』32, 106-113
- PROG 白書プロジェクト編 (2016) 「PROG 白書 2016—現代社会をタフに生き抜く新しい学力の育成と評価—」学事出版.
- 安永卓生・藤江美奈・山本鉦・播磨良輔・山下修充 (2019). 「九州工業大学における入試区分別の PROG・GPA を用いた追跡調査と制度設計」『大学入試研究ジャーナル』29, 15-22